

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：13902
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2013～2016
 課題番号：25370255
 研究課題名(和文)文化政治前期の植民地朝鮮における図書館と 翻訳 ―日韓文化交流史の再構築―

研究課題名(英文)Libraries and translation under the colonial administration of Korea in the early 'Bunka Seiji (cultural government)': reconstructing the history of Japan-Korea cultural exchange

研究代表者
 奥田 浩司 (OKUDA, Kouji)
 愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90185538

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：文化政治前期の植民地朝鮮における図書館について調査・研究を行うと共に、朝鮮語雑誌における 翻訳 の状況について検討を加えた。具体的に述べれば、京城図書館と朝鮮人知識人との関わり、京城図書館の表象のされ方、日本語書籍の蔵書状況について調査・研究を行った。また、延世大学附属図書館に所蔵されている朝鮮語雑誌の調査を行い 翻訳 という観点から考察を行った。

京城図書館は、朝鮮人知識人にとっては独立運動と不可分なものであったと考えられる。また、朝鮮人知識人の 翻訳 についても植民地支配への抵抗という側面から考えることができる。

研究成果の概要(英文)：We investigated and studied libraries in the early 'Bunka Seiji' period and examined the situation surrounding the translation of Korean magazines. Specifically, we investigated and studied the relationship between the Keijyo Library and Korean intellectuals, how the Keijyo library was represented and the collection of Japanese books. We also investigated Korean magazines in Yonsei University Library and considered them from the perspective of translation. For Korean intellectuals, the Keijyo library is considered as indivisible from the independence movement. Korean intellectuals can also think about translation from the aspect of resistance to colonial rule.

研究分野：日本近代文学

キーワード：植民地朝鮮 図書館 日韓文化交流史

1. 研究開始当初の背景

植民地朝鮮では、1919年3月に3・1独立運動が起こる。日本政府は統治手法を文化政治へと改める。それに伴い、朝鮮語による出版が比較的自由になり、多数の朝鮮語雑誌が発行される。

このような状況下において1920年11月に京城図書館が朝鮮人知識人の手によって設立された。

京城図書館をめぐる状況については、加藤一夫・河田いこひ・東條文規『日本の植民地図書館 アジアにおける日本近代図書館史』（2005年 社会評論社）宇治郷毅「近代韓国公共図書館史の研究 開化期から1920年代まで」(『参考書誌研究』第30号1985年9月)に詳しい。

先行研究によると、京城図書館は、1926年に京城府立図書館鍾路分館として京城府に移管される。この間ほぼ6年間にわたって、京城図書館は、朝鮮人の手によって運営されたことになる。

文化政治下において、朝鮮人知識人は朝鮮語で雑誌記事を書き、図書館を運営していた。このような朝鮮人知識人の文化的な営為について、日本との関わりから考えることで、日韓交流史の新たな側面に光が当たるのではないかと考えた。

本研究では大きく以下の2点について問題意識を持つに至った。

(1) 京城図書館は、どのような日本語書籍を所蔵し、どのような利用のされ方をしたのか。

(2) 朝鮮語雑誌に掲載された記事には、日本語からの翻訳と考えられるものがある。どうして翻訳したのか、またどのような文脈で翻訳されているのか。

2. 研究の目的

本研究は、以下の点に着目しつつ研究を進めた。

(1) 京城図書館の日本語書籍について調査を行う。

(2) 京城図書館の表象のされ方について考察する。

(3) 京城図書館がどのように利用されていたのか調査・考察する。

(4) 朝鮮語雑誌に掲載された記事において、日本語からの翻訳と考えられるものを調べ、問題点について考察する。

3. 研究の方法

(1) 京城図書館の蔵書は、ソウルにある鍾路図書館と南山図書館に収められている。書庫での蔵書調査を考えているが、許可されな

い場合には、目録検索により研究をすすめる。

(2) 様々なメディアが、京城図書館について取り上げている。その表象のされ方について考察する。

(3) 朝鮮語雑誌『現代』について、翻訳の問題を検討する。『現代』を取り上げる理由は、植民統治時代の高等教育機関であった延禧専門学校との関係が考えられるからである。

4. 研究成果

(1) 京城図書館における日本語書籍の調査について、以下のように報告する。

鍾路図書館、南山図書館では書庫での調査は許されなかった。そこで図書館に備え付けられているパソコンを使って検索し、植民統治時代に所蔵していたと考えられる日本語書籍について調査した。

調査の過程で、有島武郎著作集が複数冊所蔵されていたことが分かった。『有島武郎著作集 第四輯 叛逆者』(大正九年九月新潮社)、『有島武郎著作集 第八輯 或女(前編)』(大正八年六月叢文閣)、『有島武郎著作集 第九輯 或女(後編)』(大正八年九月叢文閣)、『有島武郎著作集 第十六輯 ドモ又の死』(叢文閣 大正十二年一月)を閲覧したところ、京城府立図書館蔵という蔵書印が押されていることから所蔵していたことが確認できる。

ただし、蔵書印が「京城府立図書館」となっており、「京城図書館」の所蔵であったのかどうかは不明である。

その一方で、大杉栄『相互扶助論』(大正十二年五月春陽堂)を閲覧したところ、㊦の印が押されていた。㊦については、『京城府立図書館 図書目録 (昭和八年七月三十一日現在)』の「凡例 7」が参考になる。そこには「本書目録の図書館中、其の内容から見て、一般或は特に学生に対して、閲覧を許さぬものが若干ある、是等の図書は、取扱上、㊦或は特(丸囲み)の符号を付け、夫々他の図書と区分してあるけれども、目録上には、是を明示して居ない、従つて、本書目録の図書と雖も、閲覧を拒絶することがある。」とある。この記述を参考にすれば、大杉栄の『相互扶助論』は、所蔵はしていても閲覧を禁止されていたことになる。

宗主国である日本で出版された書籍が、植民地朝鮮の図書館では閲覧できなかったことを確認することができる。

上記の内容については、有島武郎研究会第60回全国大会(2016年11月19日明治大学駿河台キャンパス)における発表「『或女』のイデオロギー 平塚らいてう・恋愛・狂気」において言及した。

(2) 京城図書館の表象のされ方について、以下のように報告する。

京城図書館は、『京城日報』『東亜日報』など様々なメディアで取り上げられるが、本研究では京城府の広報誌であったと考えられる『京城彙報』について調査を進めた。

『京城彙報』第十一号(大正十一年十月京城府)には、京城図書館を運営していた李範昇の「京城図書館と私」が掲載されている。その記事には「故金充植氏が館長に、尹益善氏が主幹となられ経営の任に当たり相当の成績を挙げつゝありましたが経営困難の窮境に瀕してある際に、丁度私が新に図書館を現今の本館即ちパゴダ公園の西隣にある旧洋楽隊の建物を秘書課長守屋氏の尽力により総督府より無料にて借受け設立する様に成るや」と、李範昇が京城図書館に関わるようになった経緯が記されている。ここで注目されるのは、「総督府より無料にて借受け」とあるように、京城図書館は総督府と深い関わりがあるように述べられていることである。

しかし、だからと言って李範昇は総督府との関係のみを強調しているのではない。館長であった「金充植」に着目すれば、別の側面が見えてくるのではないだろうか。『大阪朝日新聞』に掲載された記事「金允植、李容植の朝鮮独立運動」(1919.6.28付)には、「被告人金允植、李容植は何れも日韓併合に対し内心熱烈なる反対の心を懐き居りしも陽に之に賛同したる為め当時朝鮮貴族の栄爵を拝受し」とある。金充植は、朝鮮の独立を志向していた人物であると考えられる。

この点を視野に収めれば、李範昇の京城図書館をめぐる発言の背景には、朝鮮独立の問題のあることが見えてくるのではないだろうか。

その一方で『京城彙報』は、京城図書館をあくまで日本との関係から位置づけて行く。『京城彙報』第8号(1922年6月)に掲載された「京城図書館を見るの記」では、「新聞の種類は内地の重なるものの外府内発行の各新聞及鮮内各地の新聞紙を蒐集して閲覧せしめている、閲覧者は内鮮人相半ばし場合に依つては内地人の多数を占むる時あるを聞く」と、内地人(日本人)の利用者の多いことが強調されている。

『京城彙報』に掲載された京城図書館に関する記事が示唆しているのは、朝鮮人の図書館を、言わば日本に包摂しようとするところであると考えることができる。

上記の内容については、東アジア日本語教育・日本文化研究学会2016年度国際学術大会(2016年8月5日ハワイ大学ヒロ校)において報告した。

(3) 京城図書館はどのように利用されていたのか、という点について報告する。

李範昇の「京城図書館と私」(前掲)では、次のように記されている。

此頃は本館のみで一日入館者平均百八九

名でありますが無料入館を許す時は一日三百人以上の閲覧者もありました、過去一ヶ月の入館者が約四万人程あり出納書籍が七万巻程になります、書籍の都合上未だ貸出は致しませんが出来得る丈早く貸出制度を実行し度いと思つて居ります。

この記事が掲載されたのは1922年であるが、李範昇は、一年間の利用者数が4万人におよぶとする。

宇治郷毅「近代韓国公共図書館史の研究 開化期から1920年代まで」(前掲)では、1923年度の入館者について「全入館者数は70,606人」であり「このうち日本人利用者は5%強の4,040人にすぎなかった」と述べているのであり、ほとんどの利用者は朝鮮人であることがわかる。

では、実際の利用状況はどのようなものであったのだろうか、『京城彙報』の記事から探してみたい。第八号(1922年6月)掲載の「京城図書館を見るの記」では、「此の日も学生らしき多数の鮮人と内地人の三四人を見受けたのである」とあるのであり、学生の利用が多かったことをうかがわせる。また、第十七号(1923年3月)の「図書館事業界の片々」には次のような興味深い記述がある。

仁川府立図書館に於ける二月中の閲覧者数は内地人百十一人鮮人九十九人(内地婦人四人鮮人婦人二人)で鮮人青年間には思想信仰方面のものが歓迎され内地人の方は趣味本意のものが喜ばれて居ると云ふことである。

地方の公立図書館では、朝鮮人の青年が思想や宗教について知識を吸収しようとしていたことがわかる。京城図書館でも同じ状況にあったと考えて強ち間違いはあるまい。

上記の内容については、拙論「研究ノート 京城図書館の設立と利用状況についての一考察」(『国語国文学報』第74集2017年3月)において報告した。

(4) 朝鮮語雑誌の記事における翻訳の問題について報告する。

本研究では、『現代』に焦点を当てた。『現代』は、朝鮮人留学生によって、東京で発行されていた朝鮮語雑誌の一つである。

管見による限りではあるが、現在、比較的多く所蔵しているのは、延世大学附属図書館の金允經文庫である。金允經は、延世大学の前身である延禧専門学校の卒業生である。金允經が所蔵していた『現代』を、延世大学図書館に寄贈したのである。

本研究の観点から注目されるのは、『現代』第5号(1920年5月)に、掲載された下熙塔の「民本主義の精神的意義」(原文ハングル・奥田訳)である。「民本主義」は、大正デモクラシーの中心的な知識人であった吉野作造によって提唱された。下熙塔は、吉野

の主宰した黎明会の講演会に参加している。
下熙瑤によって「民本主義」はハングル語
によって翻訳されるが、内容は日本で共有さ
れていた思想内容とは異なる。「民本主義」
は翻訳されることで、植民地朝鮮の文脈に置
き換えられていると考えられる。

上記の内容については、第四回中日韓朝言
語文化比較研究国際シンポジウム（延辺大
学・中華人民共和国）において報告した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

奥田浩司、研究ノート 京城図書館の設
立と利用状況についての一考察、『国語
国文学報』、査読無、第74集、2017、
pp.35-46

〔学会発表〕（計4件）

奥田浩司、『京城彙報』の中の京城図書
館-同化の政治学-、東アジア日本語教
育・日本文化研究学会、2016年8月5
日（金）、ハワイ大学ヒロ校（ハワイ・
アメリカ合衆国）

奥田浩司、朝鮮語雑誌『現代』の「デモ
クラシー」、第四回中日韓朝文化比較研
究国際シンポジウム、2015年8月19日、
延辺大学（延辺・中華人民共和国）

奥田浩司、植民地朝鮮の図書館の諸相、
文化史研究会、2014年度例会、2015年
3月21日、石川四高記念文化交流会館
（石川県金沢市）

奥田浩司、植民地朝鮮の図書館について、
文化史研究会、2013年度例会、2014年
2月1日、石川四高記念文化交流会館（石
川県金沢市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥田 浩司 (OKUDA KOUJI)

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90185538

(2) 研究分担者

梶谷 崇 (KAJIYA TAKASHI)

北海道科学大学・未来デザイン学部人間社
会学科・教授

研究者番号：10405657